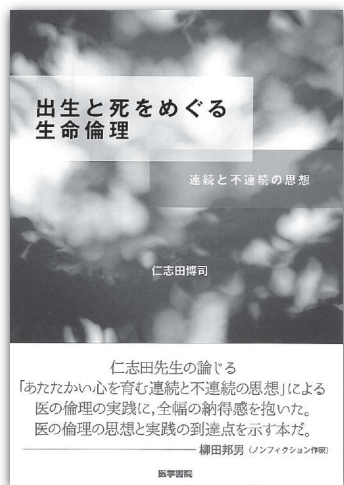


この本、いかがですか？

医療の進歩が著しい現在、 ますます必須となる生命倫理



出生と死をめぐる生命倫理 連続と不連続の思想

仁志田博司 著
本体 2700 円＋税
A5 判／医学書院／2015 年

評者

船戸正久

大阪発達総合療育センター

著者は、北里大学、東京女子医科大学で周産期医療センターの責任者として長年、深く新生児医療にかかわり、日本周産期・新生児医学会、日本新生児成育医学会などの学会を積極的に先導した先輩医師のお1人である。新生児の生と死にかかわる現場から、こうした生命倫理の問題にも先駆的に取り組み、学術的にも大きな貢献をしてくださった。

著者のもっとも大きな貢献は、イェール大学のダフ博士の分類を基にした「新生児医療における倫理的観点からの意思決定」、いわゆる「仁志田の基準」(クラス A～D)を学術的な観点か

ら学会の場で紹介してくださったことである。この発表は聴衆に大きなインパクトを与え、その1人であった私にも大きな影響を与えた。最初の頃は学会でも、新生児の倫理や死の問題はタブー視され、その発表に対して、私を含め誰も手を挙げて質疑する人がいなかったことを非常に印象深く覚えている。

その後、約30年経った現在、学会でも倫理に関する知識が徐々に浸透し、子どもの最善の利益を中心に、こうした倫理問題が活発に議論できるようになった。これは、最初に勇気ある口火を切った著者の大きな貢献である。その後、著者は、それまでのまとめとして1999年に『出生をめぐるバイオエシックス——周産期の臨床にみる「母と子のいのち」』(メジカルビュー社)を編集・執筆し世に問うた。

そして今回、その集大成としての本書を医学書院から出版した。出生と死をめぐる医療現場で、私たち医療者や一般のご家族が会う可能性のあるさまざまな倫理的ジレンマを幅広い知識と知恵で網羅している。そして、その解決の基本は長年著者があたたため公表してきた「あたたかい心を育む連続と不連続の思想」であると述べている。

その一例として、柳田邦男氏(ノンフィクション作家)も感動を覚えたという無脳症の子どもを出産した40歳の春美さんの例を挙げている。児は出生後、侵襲的な蘇生を受けず、母親の胸に抱かれ永眠した。両親が女の子らしい洋服と小さく縫った帽子を用意し、洗礼を受けさせた。そして3人目の子どもをもつことができたことを関係者に感謝して退院したとある。

ぜひ医療にかかわる多くの若い方々に読んでいただき、著者の生命倫理の根底に流れる「あたたかい心を育む連続と不連続の思想」を学んでいただきたい。

J